

初めての人のための『 猫ブーとは何か』
H7.6.1/全日本社会教育連合会
社会教育50巻6号

LNET

REPORT

初めての人のための 「猫ブーとは何か」

西村美東士

(エルネットワーカース通信員・
昭和音楽大学短期大学部助教授
猫ブー年間講師)

はじめに

最近、猫ブーの「名声」は、東京・神奈川を中心に、全国の青年行政担当者や青年活動関係者のあいだに「こ」は言って

も、そのうちの一人のあたりに知られるようになり、網走などの遠くの地からも含めて、見学や交流のために猫ブー開催日の木曜日の夜に猫ブーにおいでになる人たちができています。猫ブーとしては大歓迎である。もともと猫ブーは出入り自由のフリースペースとしての側面も持っているからでもあるが、それよりも同時代を生きてる人との「出会い」を楽しみたいからである。ふだんの猫ブーなら、その日のプログラムに「出会い」を組み込んで柔軟に展開できるだろうし、また、プログラム自体は変えられないような日でも（猫ブーでは、来訪者のために自分たちが「個性になって」プログラムを変更するようなことはしない）、その日のプログラムを楽しんでいたければ、きつ

と猫ブーの受容的な雰囲気味わうことができてと思う。ひとこといえば「気軽においでなさい」ということになる。

そこで、この文章では、今まで述べた前提のもとに、初めての人のために、とくに青年行政担当者や青年活動関係者が関心をもつと思われる猫ブーの特徴について、基本的なものをまとめておくことにした。より詳しくは、これまでの拙論や「いなほ」（青年教室活動記録）でそれぞれのメンバーの文章をお読みいただきたい。

1 ヒエラルキーを脱却はすブータローの「自由な遊び心」

今日までの学校偏重社会では、人を上

下に並べてひとつの物差しで比べる。それは、結局は、偏差値を代表とする画一化した価値のもとに、個性による「逸脱」を外からも内からも抑制する「同一化」の圧力として作用してきた。そして、この学校偏重の価値観と、その価値観を内面化してしまった私たちが、社会全体のヒエラルキー（階層）構造を支えてきた。それらすべてに共通する特徴は、上下関係による支配と服従、多様な異なる価値の排除と画一化などである。

これからの形成が期待される生涯学習社会においては、一人ひとりの異なる個性が認められ、歓迎されるはずだ。人間関係においても、ヒエラルキーの上下関係のなかでの地位・肩書きや制度上の権威などよりも、水平関係のなかでの異な

LNET
ワーカース
通信

る個性（個の深み）とほかはよびたい」との出会いが求められる。しかし、そういう生涯学習社会を築くより生きるためには、私たちが自身に、内なるヒエラルキーと闘い、「自由な遊び心」をみずから取り戻すことによって、無知で非力な自己を受容し、自己と異なる他者と共感することが求められる。狗プーがめざす「ブローカー精神」とは、そういうことである。

初年度の狗プーのチラシの呼びかけ文はつぎのとおりである。

「ブローカーとは、フーテンの寅さんのような人のことをいいます。寅さんは、自然を愛し、あたかも隣人に恵まれ、本当の友だちをたくさんもっていて、心豊かに生きていると思います。私たちはそんな寅さんにあこがれます。

私たちが社会に生きていくためには、今の仕事や学業をやめようというわけにはいきません。でも、自由な遊び心は失いたくないのです。

狗プーでは、ブローカー精神にのっとり、豊かな時間と空間を創り出そうと話し合っています。かけがえのない自分の人生をていねいに大切に生きるために、あなたも狗プーの一員になませんか。」この呼びかけ文の第二段落は、よくとては、ヒエラルキーの人間関係について批判的に書いたつもりである。しかし、このぼくの思いは、いまだにメンバーから「共感できない」といわれることが多い。メンバーのなかには、仕事や学業だてていきたりと考えている人が多いし、実際に、ヒエラルキーのなかでの「ゲーム」を「自由な遊び心」でそれなりにこなしてしまう人も多いのだ。あるいは、仕事

や学業については、「自分の人生」そのものはと切り離して考えている人もいろいろある。その場合は、本人の自己認知の有無はともかく、「自分の人生」のうちに精神的に大切な部分は「ヒエラルキー以外のところだ」と考えているのだろう。

後者だとしたら、社会と自己の関係のさらなる客観視という課題が、狗プーの今後の課題としてあげられるだろう。狗プーの番外編で、自発的で自然的な勉強会として「セカンドステージ」が運営されている。通常の狗プーのプログラムとは別に、メンバー同士でじっくりおしゃべりしてみたいというのである。これなどは、仕事や学業に対する他者の姿勢や意見に、自然なかたちでふれる機会として期待してよいだろう。

そこで重要なことは、公民館の職員や講師が直接には発関することがなくとも、社会とそれとの関係が社会的・共感の雰囲気の中で語り合われているということである。「セカンドステージ」は、公民館の担当専門職員が夜間勤務のときの夜に不定期に行われている。そこでの職員の役割は、非指示的であり、不定形である。これは、学級・講座での司会や講師代行などと思われられるような、現代化しきつて型にはまってしまう社会教育的支援を、もう一度、本来の人間的な「なまの営み」に戻すという意味をもっている。

2 自分の人生をていねいに大切に生きたいという「ミイイズム」肯定

自己の「仕事や学業」についての狗プーの認識の現段階は以上のとおりであるが、

それよりもメンバーから今日まで強烈な支持を集め続けているのは、「かけがえのない自分の人生をていねいに大切に生きたい」というフーズである。この言葉は、コマーシャルなどのふつうの世の中の感覚では当たり前にすぎず青年にとってのインパクトが大きいと思うが、青年活動や青少年教育・青少年行政の世界ではけっこう自新しいことといえよう。今でも、何人かの他の自治体の関係者は、この呼びかけ文を読んで、狗プーの境界として「ミイイズム（自分主義）」を指摘するかもしれない。

しかし、ぼくはつぎのようにいたい。「自分の人生をていねいに大切に生きたい」と思うことがミイイズムだとしたら、ミイイズムのどこが悪いのか。狗プーミイイズムでけっこうではないか。「自分の人生をていねいに大切に生きたい」からこそ、学習する、仲間を見つめる、社会参加する、社会改革をめざすなどに、自発的に発展するのであって、参加した一人ひとりが、そのどこに向かって発展しようとかまわらないではないか。リーダーやボランティアだって、これからの時代は、「自分のためにやっている」といえることが、古くからある条件である。

あるには、占星術や新・新宗教、偏狭な事故発生セミナーなどにはまってしまう人もいるかもしれない。それだって、本人の自己決定の一環として行われるのであれば、援助者側がその結果に「責任を感じてしまう」のは、むしろ傲慢なことではないか。あとで「自分の人生をていねいに大切に生きたい」ということにならなければ本人が考えるようになるのだ。そう考えたときに本人が軌道修正を自己決定するだろう。

何がよくて、何が悪いのかなど、具体的に教えられるものではない。私たちができることは、本人みずから気づきのためのチャンスをみんないかに提供するにすぎないのだ。これに比べて、従来多くの青年活動や青少年教育・青少年行政においては、援助者としてのその深い目覚（非力な自覚）または禁欲が欠けていたのではないか。

3 善と悪、善と悪の混在するアンビバレンツな人間存在への関心

狗プーにはこれといったスローガンがない。先日、狗プーでキャンプに行くとき、担当者が子どもたちの野外活動向けの他事業の文書をさがしながらしおりを作ってくれた。そこには「来たときよりも美しく」というキャンプ生活のうさでのスローガンが書かれていて、それを読んだぼくらはいつせいに吹き出してしまったのを覚えている。いつもの狗プーの風土からは、そういうスローガンはかなりミスマッチなのだ。

狗プーのいつものペースだと、つぎのようになるだろう。キャンプの夜が明けると、徹夜の朝がきた。気の利かない人か（者）（ぼくなど）は、ぼくとしていける。しかし、ふと気がつく。朝早くから起きて炊飯場のまき火を起こしている者もいれば、みんなが使ったパンガローのふかえをベランダの手すりや並べて「ふとん干し」をしている者もいる。それらの人たちは勝手にそうしている。スローガンのもとにない。せいに動くというところではないのである。しかし、いろいろとやってくれているという仲間を見て、ぼくたちは「ああ、〇〇君って

5 いい男、いい女の支援さえすればよい

それにしても、恋愛問題をはじめとして、これに「いい男いい女」が期せずして狙われて集まってくるのはなぜだろうか。その種々の原因としては、狙いが最初に述べたような「自分の人生をいかに大切にしたい」という彼らの心には呼びかけられていること、彼らが「自由への恐怖」を突きつけるなかで、みずから内なる差別意識や被害者意識と闘い、たかましく自己成長し続けてきたことがあげられる。そして、本節ではつぎのことをいいたいのだが、消極的原因としては、いい男いい女ではない人、あるいはそうであろうとして努力する気がまだない人、あるいは「排除」されていくということなのである。たとえば、今の世の中の風潮では、「人を傷つけてもいいから、自分の傷を癒したい」という不幸な認識をもっている人たち（「イヤなヤツ」）は残念ながら多いだろう。現実社会では、そういう人が幅をきかせたりしている。たとえば、相手の女性が傷ついている。自分のナンパが成功すればよいなどという男性は、たくさんいる。しかし、そういう現代社会の人間関係が、狙いにきている人たちにとっては、狙いに「イヤなヤツ」が入ってきくのである。ただし、狙いは出入り自由を原則としている。新規参入も自由なのである。そこで、担当の職員や講師のほかに、そういう人の排除を頼む人もいる。しかし、その排除行為をばくちで済ませたまま、狙いの狙いの存在価値はなくなると思っ

ている。ネットワークではなく、ファシズムになってしまっている。

やはり、望ましいのは、「いやだ」と思った人が「あなた〇〇という行為は私はいやだ」とさわやかに自己主張することなのだ。その人から電話がかかってくるのがいやだったら、「あなたからの電話はほしくない」ときちんというべきなのだ。ちゃんとそういうふうに主張できる人も狙いにはいる。そのことによつて、いい男いい女になる気のない人は狙いから自然に排除されていく。つまり、ここでの排除とは、既成や規則などによつてではなく、個々人が内面的に排除することなのである。だからこの世の中ですくなく生きていくためには、「イヤなヤツ」が（単純なナンパ目的など）少しは入ってくるのも、「人びとがいがみある現実社会のなかでどう生きるかの絶対的トレーニングの機会になるのだ。それに、さわやかな自己主張ができれば、それは基本的信頼を示す行為の一環でもあるのだ。もしもかた、「イヤなヤツ」にとっては生まれて初めてのいい体験になり、「イヤなヤツ」から「いい男いい女」に自己変容する可能性をもちているのだから。まあ、どちらにせよ、いい男いい女だが狙いに残るという同じ結果になる。

「被害者意識」に陥らず、さわやかに主張できる人、あるいは「いやなときは、深く撤退して静かに微笑んでいる人」などと定義ができるかもしれない。どの場合でも、もともと弱い存在としての人間が、それほどの徹底したいいい男いい女になれるわけがないとも考えられる（人間はかわらない「ろくでなし」であることにはかわらない（他参照））。だから、実際には、いい男いい女になりたいたいと思っている人たちのことを「いい男いい女」ということになるかもしれない。

人が偏見や学校歴などの画一的な物差しで比べられてきた学歴偏重社会に対して、それに代わる生涯学習社会の重要な指標のひとつとして、「人が個性に応じて適正に評価される」ということがあろう。しかし、それが表面的な評価にすぎなかったり、資格取得などによって他者を打ち負かすことを目的にした非人間的な受験地獄が再現したりするのは、人間の幸福追求のあり方に沿うものとはいえないであろう。狙いは、「イヤなヤツ」がおいしい目にあうのではなく、いい男いい女こそが正当に評価される社会を創り出すという営みの一環といえるのである。

社会教育の全国的状況からみても、前節で述べた公的サービスの存在意義を考えると、よほどの人的・財的余裕のない限り、いい男いい女になりたいたいという意思のない「イヤなヤツ」に追従するようなサービスをする必要はないといえる。そんな余裕があるのなら、本来は社会からいい男いい女として評価されていくはずの一部の青年たちが、現代社会では「癒しのサンマ」を味わうことなく疎外されて生きている現実を、関係者ももっと深刻にとらえて、せめて「何とかしたい」ぐらいには思ってもらいたい。もちろん、実際には、全国の青年教育の場では、いい男いい女が集まってきているとは思っている。ただ、行政側や担当者から「公平の原則」を機械的に解釈してしまつて、参加者が少ないなどの理由からその事業に消極的になったり、表面的な事業展開をしつづけることによって、そのせつかくのいい男いい女の参加をいかにしきれていない結果に陥っていると思ふのだ。

おわりに ——癒しと成長 受容と変容の循環——

最後に、メンバーひとりの自己成長の側面から狙いの特徴をひとことで表すならば、次のようなことになるだろう。それは「癒しと成長」あるいは「受容と変容」ということである。しかも、それがよい意味での相互の循環効果を及ぼすのだ。

競争社会におけるキヤッチアップ型（追い付け、追い越せ）の教育は、学習者の成長・発達だけを重視してきた。しかし、本人が個人として生きていくときの意味としては、癒し・安らぎという要素も重要なのである。生涯学習時代の社会からの援助は、これを重視して行う必要がある。癒しのあふれた成長も期待できよう。社会的に認知されてこそ、他者から受けてこそ、自己実現は成立するのだ。もちろん、それは、逆の方向にも望ましく作用する。言葉をかえれば、受容と変容は循環するということである。

自己や他者の弱い部分や醜い部分があるがままを受け入れる（受容）ことによって初めて、自己の現状の枠組みを自己嫌悪に陥らずに少しずつ改善する（変容）勇氣をもつことができるのだ（ただし、受容は第一義の援助目標とすべきだが、変容はかならずしも必要不可欠のものはすべくないと思う）。

開きたい心を安心して開くことのできる抱ブーのサンマ（時間・空間・仲間）は、癒しと受容を創り出し、そのことによって、成長と変容を実現する新しい援助形態として現代学歴社会に抗して存立しているのである。

（注）抱ブーとは抱江市中央公民館で行われている青年教室「抱江フットロー教室」の愛称である。

ACCESS

抱江市中央公民館（担当 岩崎）

TEL 03 (3488) 4411